

プロスポーツ観戦におけるバディ効果と地域活性化

スポーツコミュニケーションゼミナール 1315055 本田 瑤子

1. 研究動機・研究目的

人は生活における数多くの場面で、自分ではない誰かとのつながりを持っている。この世に生を受け、成長していく過程で家族や友人、恋人、会社の同僚といった様々な関係性の誰かとのつながりを持つことは避けられない。自分ではない誰かとのつながりを持つことは、心の豊かさにつながる。その中でもスポーツ観戦という場において、人と人とのつながりは観戦者に大きな影響を与えている。試合観戦時の緊張感や興奮する気持ちを自分ではない誰かと分かち合い、一緒に同じ選手やチームを応援することで「自分は一人ではない」という安心感を得ることができる。では、このスポーツ観戦における「自分は一人ではない」という気持ちは、いったいプロスポーツの現場においてどこまで影響を与えているのだろうか、実はスポーツ現場を超えた大きな力を持っているのではないかと、という疑問が浮かび、それを明らかにするため、本論文を執筆することとなった。

本論文では、変わりゆく人とのつながりの理想の在り方と今後の展望から、さらにスポーツ観戦に的を絞ってバディ効果の影響について分析する。人とのつながりが希薄化した現代において、スポーツ観戦によるバディ効果を利用して人々が精神的なやすらぎや充実感を得ることで心を豊かに保ち生活できるということ、さらに地域活性化にも影響を与えるということを明らかにする。そして、スポーツ観戦と地域活性化がさらに結びつくための課題について考える。

2. 研究方法

本論文では、スポーツ観戦によってもたらされたバディ効果とその先に起こる地域活性化について、文献「スポーツ観戦要因のメカニズムについて—スポーツの経験価値を視点に—」（有吉 2011）、「ソーシャル・キャピタル——スポーツ論への可能性——」（鬼丸 2007）、「スポーツファンの心理変化プロセスに関する研究—質的研究を用いた変容解明—」（瀬戸 2011）、「スポーツによる地域活性化—直接の効果と外部経済効果—」（筒井 2012）、「Jクラブの存在が地域にもたらす効果に関する調査」（株式会社 日本経済研究所 2009）、「なぜサポーターは熱狂的に応援するのか—ベガルタ仙台サポーターを事例に」（本郷 2016）を対象に調査した。

3. 主な結果と考察

本論文では、プロ野球チーム（広島東洋カープ）、Jリーグチーム（ベガルタ仙台）による地域活性化についてそれぞれ調査した。その結果、スポーツ観戦におけるバディ効果は、応援する選手・チームへの愛着につながるということから、その選手やチームが活動拠点としている地域に対しても愛着が強まり、スポーツ観戦がもたらしたバディ効果は地域活性化にも影響するということがプロ野球チーム、Jリーグチームどちらの事例でも言える。

4. 結論

現代に生きる日本ではインターネットの発達や単独世帯の増加が進み、その結果多くの人が孤独感を抱えて生活しているため、人々は心のつながりを求めているということがわかった。この孤独感を解消するためには、自分は一人ではないという感情をもたらすバディ効果が有効であるということが明らかになった。日常生活のあらゆる場面でバディ効果は表れているが、特にスポーツ観戦において、バディ効果は大きな意味を持っている。同じ選手やチームを応援することによって多くの人と気持ちを共有できるため、現地でスポーツ観戦した際には一気にたくさんの観客と一体になれるため、大きなバディ効果が働く。そこで生まれたコミュニケーションから人とのつながりが生まれ、また観戦したい、観客との一体感を得たい、という気持ちから、応援する選手やチームへのロイヤルティを向上させる。そしてさらに、応援する選手やチームが行う地域貢献活動やコミュニティ活動に参加することにより地域への愛着も強まり、地域の活性化にもつながる。その結果、大きな経済効果が生まれるなどの効果が期待できる。

5. 卒業論文の執筆を終えて

言うならば、自分自身の心にある甘えとの戦いだった。執筆を始めるまで、そして執筆にとりかかってからも「まだ大丈夫」と囁く悪魔（当時の私にとっては天使）にとりつかれていた。悪魔に甘やかされながらも締め切り日はどんどん近づき、ギリギリにならないと行動できない自分の性質を何度も何度も恨んだ。しかし、なんとか書き終えることができてしまったため、この性質はこの先も変わることはない悟った。